

2010.8.21 バレエスタジオA i l e 第2回発表会

～Dream～

第1部

Jewelry Box ～バレエ小品集～

作品解説

- 1、クラシカル・ダンス in *Major* ～Circle of friends～
- 2、リラの精のヴァリエーション
- 3、赤ずきん
- 4、海賊より女性ヴァリエーション
- 5、スターダスト
- 6、ライモンダのヴァリエーション
- 7、*Snow Diamond*
- 8、*Call of the Fairy*
- 9、グラン・パ・クラシックより女性ヴァリエーション



1、クラシカル・ダンス in Major ~Circle of friends~

音楽：ヴィヴァルディ

◆踊る人◆

これを踊るのは当スタジオのB2クラス（小5～6）。

いつもみんなで輪になりながら、レッスンが始まるまでの時間楽しくおしゃべり。

そんな和気あいあいとした雰囲気 작품을作品としてカタチに残してみなさんに伝えたい！

そう思ったのです。当初、何人かに分けて別々の作品を・・・とも考えていたのですが、

せっかくこのクラス「仲良し」という素敵なところを切り分けてしまうのはもったいないと思い、全員で踊る振付を作りました。

◆使った音楽◆

「音楽要素」にも意識を向けた今回の舞台。

幕開けのこの作品に使った音楽はヴィヴァルディの四季からの抜粋。

18世紀、バレエがまだオペラと融和し合っていた頃、まさにこれからバレエとして確立していく、という時期の音楽を選びました。

音楽史をバレエとともに追っていく、と言っては大げさかもしれませんが

18世紀の古典音楽から幕開けていくことで、その後の現代音楽に至るまで音楽史の時間軸を、ほんの束の間でも旅していけたらと思うのです。

「バレエ」という乗り物に乗って。

幕が上がり18世紀の音楽で、21世紀の私たちが踊る。

その瞬間、過去と現代がちよっぴり繋がる、そんな風に思えるのです。

◆エピソード◆

レッスンが始まるまでの間、円陣(?)を組んであれこれと語り合うB2クラス。

踊りの話やバレエの話もたくさんしています。

その姿を見ているうちに、みんなが踊りに向かう気持ちを目に見えるカタチにしたい、そう思うようになりしました。

そこで、「せっかくだから、この踊りに対してみんなが思い描くイメージをサブタイトルとしてつけてみよう！」と提案。

みんなが抱いていたイメージは。

「仲間」

この踊りを一緒に作ってきたんだ！という意識がとても強く芽生えていたのです。

かっこよく英語がいい、ということで、皆で話し合って意見を出しました。

でも英語はなかなか難しい...そこで他クラスの生徒にも協力してもらい、

ひとつのフレーズをチョイス。それは「友達の間」という意味の『Circle of friends』

こうしてB2クラスが踊る「クラシカル・ダンス in Major」には
～Circle of friends～ というサブタイトルがついたのです。



2、 「眠れる森の美女」 第1幕より リラの精のヴァリエーション

音楽： チャイコフスキー

◆踊る人◆

これを踊るのは、当スタジオのAクラスの生徒。4年ほど前にエルにやってきた子です。今は8名が所属するAクラス。スタジオ開設当初は中学生以上が一人もいなくて、開店休業状態でした。そんなとき、彼女が入会したのです。

他に誰もいないAクラス。しばらくは個人レッスンのように一人で受講していました。

入会してすぐに講師とのマンツーマン。

それを望んでいたのならともかく、彼女にとっては予期せぬ状況だったかもしれません。

それでも黙々とレッスンをこなしていました。

彼女の持続力と物事への取り組み方は凄い。

そんな彼女が自ら踊りたい、と今回選んだのがこの「**リラの精**」のヴァリエーションです。

◆使った音楽◆

これは定番のチャイコフスキー。既存の古典作品なので、音楽も決まっています。

ヴァリエーションの冒頭部分は、徐々に音階が上がっていくようななめらかなメロディーライン。

これから始まる華麗な踊りを示唆するかのような美しい旋律です。

この曲のファンは多い！というのが私の率直な感想。

「リラの曲が好きです」と言う方はとっても多いのです。

それだけ聞き心地が良いと言えるのだと思います。

同じフレーズが繰り返されるのですが、少しずつバージョンが

変わりながら、ゆるやかになったり重厚になったり飽きさせない展開性。

1分少々短い曲ですが、1曲の中にストーリーが見えるようなそんな音楽です。

◆エピソード◆

自分が踊りたいヴァリエーションに挑戦する。

これは発表会の醍醐味だと考えています。

Aクラス（中学生以上）になれば、ある程度自分のこともわかってきます。

衣装も候補を挙げた中から、好きなものをチョイス。

自分で踊りから関連要素に至るまで決めていくことで、自然とモチベーションも高まっていきます。

リラの精のヴァリエーション。

決して易しい振りではありませんが、華やかで女性らしい踊り。

今回、彼女はどんな心境で踊りに入っていくのでしょうか。

踊りの中で自らを解き放ち、華やかに舞ってほしいと願います。



3、赤ずきん

音楽：チャイコフスキー

◆踊る人◆

今回、これを踊るのは一番年齢の低いCクラス（年中～小3）。そしてオオカミ役の成人の方。このクラスの6名で、可愛い赤ずきんを演じます。

通常は男女のパ・ド・ドゥですが、今回はそれをアレンジし

「小さな赤ずきん～エル風」に仕立ててみました。

3歳から始めてキャリア4年になる子もいれば、この間の12月頃に入会し、まだ5ヶ月未満の子もいるCクラス。最初は「踊る」って何だろう？というところから始め、このところ、ようやく踊ることにも慣れてきた様子です。キャリアの長いお姉さん組が、始めたばかりの子をリードしつつ立ち位置や足などをちょよちょよと教えていたりする姿も。初めての発表会の子がたくさんこのクラス。まずは踊ることを楽しんでもらえたらと思っています。

◆使った音楽◆

赤ずきんの踊りの音楽も、実は既存の曲としてあるのです。

実際の作品で使用する曲を、そのまま引用して使いました。

冒頭から何やら不穏な空気の流れる短調の曲。

決して明るいとは言えないこの曲は、童話赤ずきんのストーリーを暗示させるかのよう。

しかしながら全体的に起伏の富んだ音運びが、

1曲の中の物語性を感じさせラストまで一気に駆け抜けていきます。

子どもにはちょっと難しい音楽かもしれませんが、クラシックの中にはこういうものもあるんだ、という音楽経験をしてもらいたく、あえて原作からの引用をしました。

◆エピソード◆

初めて踊りに取り組む子たちが多かった、今回のCクラス。

音に合わせてステップを踏みながら、並んで踊るというのは初めての子にとっては大変！

動きながら並ぶ、というバレエ独特の運動要素は経験によって培われていくものなのだと、改めて実感。

隊列を組むことに関してはぬいぐるみを使って並び方を説明。

運動感覚をつかんでもらうためには、手作り輪投げを使いました。

曲のリズムに合わせてそれを飛び越えてジャンプ練習を。

色々な角度からアプローチできるようにレッスンメニューを組み直しました。

また、当初は予定のなかったオオカミさんが。

6月に急きょ登場！まさに波乱含みの赤ずきん。

さて、どんな物語が繰り広げられるのでしょうか。



4、 「海賊」より 女性ヴァリエーション

音楽：ミンクス

◆踊る人◆

これを踊るのはAクラスの生徒。彼女がエルに来たのは、確か2年と少し前だったでしょうか。はじめはオープンクラスで受講をしていました。そして、ちょうど2年前のエルの第1回目の発表会。忙しいスケジュールの合間を縫って、彼女は会場に駆けつけてくれました。その発表会を観て、ぜひ入会したい、2年後の発表会には自分も出演したい！と正式に入会してくれたのです。

感激でした。

自分が初めて手掛け、カタチにしたもの。それが誰かの心に届き心を動かすきっかけになったこと、本当に心の底から喜びが湧きあがってきました。そんな経緯でエルに入会してくれた彼女が、今回久しぶりのバレエの舞台で踊りたいと選んだ演目が、このパキータの「海賊」です。

◆使った音楽◆

これも既存のヴァリエーション曲をそのまま使用。

「定番ヴァリエーション用曲集」などに収められている、定番の音楽。力強いイントロからスタート。華々しいグラン・パドゥシャ（女性の大きなジャンプのステップ）から始まるこの踊りと、曲のイントロの組み合わせは躍動感に満ちたものです。

大きく3つのパートから成り立つこの曲は

動きのある力強い前半 → 流れるような中盤 → ダイナミックな後半という作りになっています。前半と後半のメロディーラインは同じで、後半はフィニッシュにかけてアレンジがなされている。これも1分少々短めの曲ですが、起伏に富んだ作りで聞いているだけでテンションが上がる！そんな1曲です。

◆エピソード◆

自分で踊りを選ぶ。

それは既存のヴァリエーションを踊るのか、あるいはオリジナルを踊るのか、という最初の一步目から選択するということ。

そこには踊りに対する「自分の思い入れ」がより深く表れてきます。

今回、海賊を踊る彼女も、このヴァリエーションを自ら選んで私に申し出てくれました。長きにわたり憧れ続けていた踊りであれば、なおのことその思いも深く強くなっています。彼女はそんな思いを素直に私に打ち明けてくれました。その思いを受け取り、ぜひ念願のヴァリエーションを舞台上で踊ってもらいたいと思い、決定。熱い思いが舞台上で花開くことを願っています。



5、 スターダスト

音楽：モーツァルト

◆踊る人◆

これを踊るのはエルのB1クラス。小3～小5の生徒です。

このクラスだけ、なぜかとても人数が少なく
他のクラスのぎゅうぎゅう詰めの雰囲気とは違って
ちょっと寂しい感じなのです。

よく言えば広々ゆったり...という感じなのですが、やっぱりちょっと寂しい感もあり。
あまり自己主張をするタイプの子たちでもないので、
いつも穏やかでのんびりしたムードでレッスンが進んでいきます。
そんなみんなに、舞台上で思いっきり自分を表現してもらいたい！
そう思って、今回「スターダスト」と名付けた作品を作りました。

◆使った音楽◆

この演目には、モーツァルトによるピアノのための12の変奏曲
「きらきら星変奏曲」より3曲を抜粋しました。

日本でもおなじみの有名な童謡「きらきら星」、実はこれ、原作はとても古いもので
18世紀末のフランスで流行した、シャンソン"Ah! Vous dirais-je, Maman"（あのね、お母さん）
の日本語名だと言われています。

後の1806年、イギリスの詩人ジェーン・テイラーの英語詩“The Star”による
替え歌"Twinkle, Twinkle, Little Star"（きらめく小さなお星様）が童謡として世界的に広まり、
それからさまざまな言語に翻訳され、現在では世界中で愛唱されるようになったとか。

1778年、パリに滞在していたモーツァルトがこの曲を主題とした
ピアノのための12の変奏曲『きらきら星変奏曲』を作曲、
それを今回の発表会のスターダストに使いました。作曲されたのは、今から遡ることおよそ232年。
星がその輝きを何百年もかけて地球に届けるように、こうして音楽もまた世紀を越えて、
現代の私たちに届いているのです。そう思うと少し不思議な気持ちです。

◆エピソード◆

この作品は私のオリジナル。

オリジナル作品には、既存の約束事の中ではできないことを盛り込みたい、と思っています。
これまでのレッスンでも、自分たちで簡単な振りを考えて作っていたB1クラス。
今回もみんなのアイデアを入れようと思い、「この曲にどんなステップが合うかな？」
と聞いてみたところ「エシャペ（足を左右に入れ替えるステップ）を入れたい！」との返事。
早速、冒頭より少し進んだところでエシャペを入れることにしました。

みんなの想いがキラキラと詰まったスターダスト。そのきらめきが届きますように…☆



6、 「ライモンダ」第3幕より ライモンダのヴァリエーション

音楽：グラズノフ

主人公は伯爵夫人の姪、ライモンダ。

彼女は騎士ジャン・ド・ブリエンヌと婚約しています。

しかし彼はハンガリー王の命に従い、遠征の途につかねばなりません。

別れを惜しみながらも彼女はリュートをかきならし、ジャンの帰りを待つのでした。

彼の帰還を待つライモンダ。そこへサラセンの王アブデラフマンが、

ジャンの居ぬ間にライモンダに求愛するのです。

アブデラフマンの情熱は激しく、力づくで愛する彼女を奪わんとする勢い。

そこへジャンが帰ってきて...

ドキドキするような波瀾万丈の恋物語。ライモンダは一体どうなってしまうのでしょうか？

◆踊る人◆

この踊りを踊るのは、成人クラスで受講されている生徒の方。

半年ほど前、このスタジオにいらっしゃいました。

正式にご入会されてから約1か月後、成人の方に向けた

発表会の説明会を開催し、そこでご出演の意志を明示され、そこからお話が進んでいきました。

その時点ではみなさんとご一緒に作品に出演する、ということに。

しかし、2年後にまた発表会に出られるかというのはなんとも言えないので、

今回ヴァリエーションにも挑戦してみたい、とのご相談を受けました。

そこで2部の成人作品とは別に、ソロヴァリエーションでもご出演されることが決まったのです。

◆使った音楽◆

震えるようなピアノの旋律。短調の物悲しげな雰囲気。苦悩とも取れるライモンダの動き...

どうしてこれが結婚の場面の踊り！？と疑問を抱きたくなる人も多いはず。

そう、これはライモンダの結婚の場面の踊り。

では、なぜ幸せいっぱいのはずの結婚の場の踊りがどこか物悲しげなのでしょう？

2人の男性の間で揺れ動いた心のひだを描いたため、というのが一般的な解釈。

実はこの「3幕のヴァリエーション」の踊り、

原典版プティパの振付をワイノーネンが独自の版を作った時、移動されているのです。

ワイノーネン版「ライモンダ」が存在すること自体、ほとんど知られていませんが、実はワイノーネンがライモンダを手がけていたのは事実です。(1938年3月22日初演)



そのワイノーネン版は4幕からなり（プティパ版は3幕構成）
この憂いの音楽は 原典版の終幕から3幕部分に移動され、
ジャンの意外な一面を知ったライモンダ、その人柄に不信感を抱き
「本当にこの人と結婚していいの...？」
と不安な気持ちで踊るという設定に書き換えられているのです。

そしてワイノーネン版では、なんとアブデラフマンとライモンダが結ばれます。
4幕でアブデラフマンとジャンの対決があるのですが、
そこでジャンが卑怯にも背後からアブデラフマンを襲おうとし、
その卑劣な行為を間のあたりにしたライモンダはアブデラフマンの愛を受け入れる、
という衝撃のラスト。

今ではほとんど見ることのできない衝撃のワイノーネン版。
プティパ版は正統派という感じがしますが、
刺激的な作品がお好みの方はワイノーネン版がお勧めかもしれません(笑)

◆エピソード◆

ライモンダのヴァリエーションは、どれもとても難しい振付。
でもこの踊りに最も大事なものは、技術よりも「心」
複雑な心理描写を要求される踊りは、やはりそれだけの経験がなければ踊りこなせません。
それはバレエの経験という意味を越えた「人生」という名の経験値。
はっきり言うと子どもには踊れないのです。

大人の方だからこそ、踊れる。

そう思い選ばせて頂きました。

ヴァリエーションには、舞台をどういう導線で使っていくかという
「ステージング」の技術が要求されます。難所がたくさんあるヴァリエーション。
揺れ動く心情。
難しい振付の中での心情表現はとても大変ですが、
舞台の上で心揺れ動くままに、自分なりのライモンダを演じて頂けたらと思います。



7、 Snow Diamond

音楽：セヴラック

◆踊る人◆

これを踊るのはAクラス3名。去年の4月にAクラスへと進級した2名と、今年の10月に新規に入会した1名、偶然にも同級生のみんなで踊ります。

この踊りはチュチュを付け、トゥシューズで踊るクラシカルな振付。

トゥシューズで本格的に踊るのは、実は今回が初めての3人。

苦労しながらも頑張っており組んでいます。

同じ年齢だと、やっぱり話も弾むのか、いつもみんなで踊りを確認したり

「せーの！」と声をかけながら自主練習したりする3人。

それぞれが学校などで忙しく、なかなか3人揃って会えないけれど、

誰かがお休みの時にもそこを埋めるように、次に3人揃った時に確認しながら練習していました。

◆使った音楽◆

この踊りに使った音楽は、私の敬愛する舘野泉氏が奏でるセヴラック。

実は作品を作るにあたり、候補曲を2曲用意し、その2つから踊る3人に選んでもらったのです。

作品のコンセプトを話し音楽を聴いてもらい、そこから3人で話し合い、決定しました。

[デオダ・ド・セヴラック](#)は南仏のランドック地方で主に活動していた音楽家。

ドビュッシーに「土の薫りのする素敵な音楽」と評された優れた作曲家でした。

しかし、彼は野心家ではありませんでした。自分の慣れ親しんだ土地で、

自分の作った曲で、村人たちと楽しむことに充足を見出していたそうです。

そのため、彼の音楽はほとんど世に出ることなく、楽譜も極めて入手が難しいのです。

日本で手に入るセヴラックの曲が収められたCDも数えるほどしかありません。

今回、生徒たちが選んだのは、そんな数少ないうちの一つです。

セヴラックのアルバム『ひまわりの海』『日々の休暇から・第2集』に収められている

「ロマンティックなワルツ」という曲。軽やかなワルツのリズムが舞い散る雪を思い起こさせます。

◆エピソード◆

この踊りはオリジナル。

そのため、音楽を選び、衣装を選び、自分たちの手で一から作り上げていくことができます。

衣装も踊る生徒のみんなに選んでももらいました。

白を基調としたチュチュ。そこにアクセントカラーの淡いブルー・ピンク・ミントが

それぞれ配された衣装を選択。しかしこの衣装の付属の頭飾りは雪の雰囲気には

どうもそぐわない感じでした。そこで私から「ティアラ」を提案、みんなもぜひそれが良い！

ということでティアラに決定。

レンタルもありましたが、思い出の品として自分たちのお揃いのティアラが欲しいとのこと。

そんな彼女たちは「お年玉貯めたお金で買えるかな？」と。なんとも微笑ましい言葉...！

またもワイワイと話し合いながら、カタログの中から1つの可愛らしいティアラを選びました。

頭上にきらめくティアラ、そこには彼女たちの想いがギュッと詰まっていることでしょう。

8、 Call of the Fairy

音楽：千住 明

◆踊る人◆

これを踊るのはAクラスの2名の生徒。高木先生の頃 から続けている子と、約3年前にエルに来た子。2人とも夏の合宿に参加し、どうやらその時に夜中に2人で何やら色々話したのだとか。

それは「2人でいつかオリジナル作品を踊りたいね!」ということ。

翌日のアンケートでそのことを知った私は、後日、発表会の作品を決める際に

「じゃあせっかくだから今回の発表会でやってみようか?」と2人に提案。

そこから話しが進み、実現することとなりました。

既存の古典ヴァリエーションではなく、オリジナルを選んだ2人。それは明らかに彼女たちの意思です。

「自分がやりたいと 思ったこと、本気で取り組めるものに全力を注ぐ」

私は、それが一番大切だと思っています。自分の意思の顕れ、

それは自分の「バレエに対する想い」です。

だからどんな小さなことでも、ほんのささやかなことでも生徒の意見を取り入れたいと思うのです。

「自分がこの作品に関わった」と、自信を持って踊れるように。

◆使った音楽◆

踊りに使う曲も、彼女たちが選びました。

候補曲を聴いてもらい、その中から選んだのは、千住明氏が作曲した「Snow Diamond」

そしてこの曲から彼女たちがイメージしたのは

「鳥のような目線で世界を広く見渡して、季節を呼び起こす感じ」

なんとも豪快で壮大なイメージ。その経緯でタイトルも本人たちが決めました。

実はこの音楽は、2005年からNHKで放映されたアニメ「[雪の女王](#)」のサウンドトラック。

ですので、もしかして耳にしたことがある方も多いかもかもしれません。

アニメ映像と合わさったものを見ると、そのイメージが強くなってしまいかもかもしれませんが、

音楽だけ取り出して聴いてみると、とても美しく悠久の流れを思わせる

なめらかなメロディが耳に心地よく響く素敵な曲です。

だからこそ、アニメにもそしてバレエにも無理なく融合していけるのだと思います。

◆エピソード◆

彼女たちにイメージを踊りにどう反映させていくか...

この振付には、始め代役を立てて行いました。

実は1名、受験で長期欠席に入っていた時期があり、そのままでは全く何も進まなくなってしまうため、他の生徒に協力してもらい冒頭部分を振付ました。

その後、お休みしていた生徒が復帰してからは2人の意見を取り入れながら進めていきました。

衣装には小さく透明感のある「羽根」を付けること に。

白と淡いグリーンの衣装、そして背中に揺らめく羽根。

想いはどこまで飛んでゆくのでしょうか。



9、「グラン・パ・クラシック」より 女性ヴァリエーション

音楽：オーベール

◆ 踊る人 ◆

この踊りを踊るのは、Aクラスの生徒。

彼女もまた、自らこの踊りを選び「挑戦したい！」と申し出てくれました。

4年前、エルに来た彼女。当時はまだ小学生でした。今回、この踊りに挑戦するという意気込みは、彼女がこれまで積み上げてきたものがあってこそその気持ち。

最初、彼女からこの踊りにしたい、と言われた時、

実はもう少し難易度の低いヴァリエーションを勧めました。

しかし彼女の「頑張りたい！」という気持ちが伝わってきて、最終的にこれに決めたのです。

何度かコンクールにも出場しているだけのことはあり、振りを覚えることや

ステージング（舞台の使い方）、目線の入れ方など、すぐに呑みこんでいきました。

大丈夫だ。練習を進めるにつれ、少し不安だった私の気持ちも、

大丈夫という確信に変わってゆきました。

◆使った音楽◆

既存作品からの抜粋なので、音楽は決まったものを使います。

この踊りに使われている曲を作曲したのは、

フランソワ・オーベール（1782年-1871年）なる人物。

そして、この演目の初演は1949年。

そう、初演されたのはオーベールの死後78年後。

彼は自分の作品がこのバレエに使われたことを知らないのです。

古典作品は、演目が企画に上がった段階で作曲者に依頼し作るというパターンが多く、作曲年代と初演年代は重なっているか、あるいは近いことが多いのです。

しかし、この「グラン・パ・クラシック」は違います。

しかもオーベールがこの曲を作曲した年代は資料に残っていないため不明。

華麗な踊りの中に秘められたミステリアスな世界。

「グラン・パ・クラシック」には、そんな音楽物語が隠されていたのです。

◆エピソード◆

この踊りの見せ場であり難所であるのは、やはり**連続ルルヴェ**が登場する場面。

ルルヴェ、とは簡単に言うとかかとを上げてつま先立ちになることで、

ア・テール（かかとが床についた状態）から、トゥシューズのプラットフォームに乗るのは、見かけよりもずっと大変でかなりのエネルギーを要します。

連続ルルヴェのシーンでは、そこで脚を動かし、さらに回転しながら、

その動作を26回繰り返すのです。想像を絶するキツさです。

最初、彼女もこの場面で苦戦。プロですら大変な難所です、それはもう当然のこと。

さらに、今回は珍しいバージョンの「アンドゥ ダン（内回転）」で挑みます。

かつてシルヴィ・ギエムがこれを踊り、話題となったのはまだ記憶に新しく、その時「史上最強の美女」と、評されたギエム。まさにこの踊りは、強さと美しさを兼ね備えたものなのです。